

Geo-Communication

ジオ・コミュニケーション NL No.6

ジオ・コミュニケーション ニュースレター (=NL) No.6

ヴェーバーはなぜ自然を語らなかったのか (3)
— 『職業としての学問』 2 —

ジオ・コミュニケーションとは、ある事象に関して、「場所」についての何らかの合意があるようなコミュニケーションを意味します。

ジオの語源は、英語の geography のギリシャ語 γεωγραφία (=geographia) の接頭語である γεω (=geo) にあり、地球、土地、土壌などを意味します。

コミュニケーションは、ラテン語の communicare を語源としますが、一つにする、まとめる、つきあう、交際する、行き来するなどの意味が含まれます。

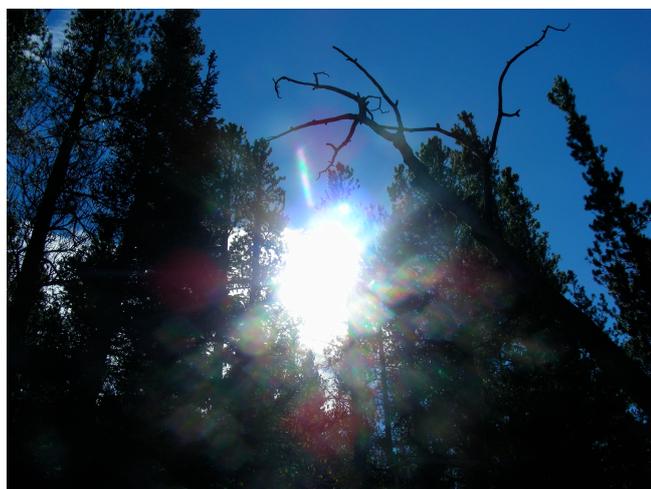
「一緒に」を意味するのが communis であり、フランス語の commune (共同体)、英語の community の語源となっています。

デジタル雑誌である「ジオ・コミュニケーション」では、主に話題提供を行う「ニュースレター」 (=NL) と個別の論文である「ワーキング・ペーパー」 (=WP) の二種類を公開していく予定です。

なお、発行元は、香川大学を本拠としている「地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム」 (=ICEDS) が運営している環境史研究プロジェクトです。

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授

村山 聡



Rocky Mountains, Colorado, USA,
October 4, 2007

連絡先：香川大学 アーツ・サイエンス研究院 村山 聡
住所：香川県高松市幸町1-1 香川大学
電話/Fax: 087-832-1571
Email: muras@ed.kagawa-u.ac.jp
URL: <http://rfweb.ed.kagawa-u.ac.jp/project/wiki/muras/wiki.cgi>

ヴェーバーはなぜ自然を語らなかったのか（3） — 『職業としての学問』 2 —

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授 村山 聡

国家資本主義と科学技術開発との関係でまず想起されるのは、第34代合衆国大統領ドワイト・アイゼンハワーが、1961年の退任演説で将来の危険を予測し指摘した「軍産複合体」Military-Industrial Complex の存在であろう。科学技術開発、国家そして国際関係がヴェーバーの時代よりさらに巨大化し巧妙化している。アイゼンハワーの時代では、軍需産業を中心とした私企業、軍隊そして政府および議会の三者がその複合体であったが、2001年のアメリカ同時多発テロ事件、9.11ショックの後、2003年3月20日より開始されたイラク戦争勃発の背景にはその三者に社会調査を主とする民間シンクタンクが加わり周到な「国家資本主義的」事業が展開されている。大量破壊兵器の存在という情報さえ捏造されてしまう。この点は、2005年に公開されたドキュメンタリーフィルム“Why We Fight”などを参照して頂ければと思う。

ただ、「国家資本主義的」という概念はもう少し慎重に取り扱う必要がある。現在では、「国営企業などを通して政府が市場の主要な参加者となる仕組み」を「国家資本主義」と呼ぶ場合があるからである。中国がその代表例であり、「金融、エネルギー、貿易、自動車などの有力企業の大半は国営」だからである。

中国の経済モデルを手本に、国営企業の優遇策を採る新興国が少ない現状では、「TPPで国家資

本主義の拡大に歯止めを」という文脈で国家資本主義が語られている（日本経済新聞、2012年4月8日「社説」）

このような国営企業の政府支援によるグローバル市場への関与というほど明確でない場合でも、国策的な研究資金が大学に組み込まれている場合ももちろんある。原発推進研究に2006年度から2010年度にかけて104億円が11国立大学に資金提供されていた。原子力推進に沿う限り研究資金を安定的に得られる仕組みであった（毎日新聞2012年1月22日）。

さて、今から100年以上前、ヴェーバーが生きた時代は、速水佑次郎がクズネツツの議論を受けて述べているように「科学の応用が経済成長の主動力」（速水佑次郎『開発経済学』創文社、1995年、152ページ）となる社会の方向性が鮮明になった時代であった。速水はローゼンベルクとピアドゼルの議論を紹介し、次のように述べる。「1875年頃までの工芸技術の革新は、ほとんど工場経営者、職工、職人たちの工夫に根をもつものであり、科学者が主役となるのはそれ以後の現象である。すなわち、1870年代以前の技術革新は主として『目に見える』機械の構造についての改良であり、それは職人の勤と技能によって対応できた。だが、それ以後、動力の中心が電気に移り、重化学工業が中心になるにつれ、技術が分子の配列とか電波の流れなど『目に見

えない』現象を対象とするようになれば、職人の技能では対応できず、科学者の組織的研究が不可避となる。」（速水、同書、152ページ）

このような科学者の組織的研究の出発点は、1789年のフランス革命とそれに先立つ18世紀に淵源がある。フランスにおいて「科学の普遍的な共和国」の物語である「科学アカデミー」の終焉に登場したものが「道具として確実に有用な科学・技術分野における専門性の発展と、その組織化を重視する」方向（隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」』名古屋大学出版会、2011年、376ページ）であった。その帰結の一つが、1794年に開設された中央公共事業学校であり、翌年「エコール・ポリテクニーク」と改称された。隠岐はこの設立を「アンシャン・レジーム期に公共事業に関わろうとした数学者達が必要と考えた、技術の知と科学の知を備えた人材の育成という構想の実現であった」（同書、362ページ）と評価している。

フランスでは、後に帝国大学工科大学の初代学長となる古市公威が留学したシヴィルエンジニアリングの養成学校であるエコール・サントラル、直訳すれば、「技芸と製作場の中央学校」が1829年に創立されている。（土木学会編『古市公威とその時代』土木学会、2004年、25ページ）。エコール・サントラル設立の目的を

記した1829年要綱では、「大いなる国益に思いを馳せる者ならば、危惧の念なくして、フランス産業の将来を考えることはできない」（『古市公威とその時代』、26ページ）としており、工業化で先行するイギリスそしてイギリスを追走するアメリカを明確に意識し、国土全体の近代化を急速に進めていたのである。

その際、注意しておく必要があるのは、「シヴィルエンジニア」というのは日本語の「土木技術者」と同義ではなく、エコー・ポリティークが目指す「国に奉職する技術官僚」と対比させる概念であったという点である（『古市公威とその時代』、25ページ）。エコー・ポリティークは、軍事工学の組織化として出発していたのであり、砲兵・工兵士官の養成学校であった。このフランス型の工学系技術者の養成モデルは、アメリカ合衆国にも伝えられ、合衆国での最初の工学講座はウェスト・ポイントの陸軍士官学校であり、1802年の設置であった（速水、同書、153ページ）。

その後、ドイツあるいは日本などにおいて、工科や農学の大学ができるのは19世紀末になる。その点で先行していた合衆国を代表する工科大学であるマサチューセッツ工科大学が設立されるのは1861年であり、産業革命で先行していたイギリスでは逆に遅れを生じていた。デイヴィッド・ランダスの概説を紹介する速水は以下のように述べている。「産業革命の先頭に立った英国では、職工た

きあげ技術への信頼とアダム・スミスのレッセ・フェールの伝統から教育・研究に対する公的活動がおくれ、1883年ようやくロンドン市の支援で開設されたFinsbury Technical Collegeがロンドン大学の一部として認められるようになったのは1908年のことであり、バーミンガム、リバプール、マンチェスターなど実業的指向の強い新大学が作られたのも20世紀に入ってからであった」という。（速水、同書、153ページ）

ヴェーバーの『職業としての学問』に戻ろう。「・・・わがドイツの大学生活は、他の生活一般と同様、いまやいちじるしくアメリカナイズしつつある。おそらくこの変化は、さらに個々の学科内まで及ぶであろう。従来はどの学科でも私講師たちはかれらの労働手段である図書類をみずから所有したものであった。わたくしの学科などでは、いまなおだいたいそういうふうに行っている。それはあたかもむかしの手工業者が自分の労働手段を所有していたのとおなじである。だが、いまや事態は急速に変化しつつある。

この変化が技術的意味の進歩であることは疑いない。これは資本主義的かつ官僚主義的な経営について一般的にいえることである。だが、こうした経営方針をとる大学の「精神」は、ドイツの大学の伝統的気風とはおよそことなるものである。また、こうした大規模な資本主義的大学の経営の管理人と、むかしながらの教授たちとのあいだには、表面的にもまた実

質的にも、非常な懸隔がある。だいたいその心構えからしてまったく違っているのである。」（邦訳、14～15ページ、下線筆者）

経営技法としての優位性を認めるヴェーバーは、「しかし、この点はこれ以上立ち入るまい」として、古いドイツの大学の体質を述べることはしないし、上記で示した経済発展と国家と技術開発の複雑な関係についても述べようとはしない。邦訳では、「技術的意味の進歩」と表現しているがドイツ語の原本は以下の通りである。

Die technische Vorzüge sind ganz unzweifelhaft, wie bei allen kapitalistischen und zugleich bürokratischen Betrieben.

ヴェーバーは、アメリカンスタイルである「労働者の生産手段からの分離」の方が国富の拡大という意味では、国家経営上、確実に優位であると述べているのであり、ある状態から別の状態への「進歩」を問題にしているのではない。しかし、このようなことは外面的なことであるとして、さらに深くこの議論を展開していない。それには理由がある。ヴェーバーは、目的的なディシプリンとそうではないディシプリンを区別しているからである。

ヴェーバーは、かつての学問が目指していた「『真の实在への道』、『真の芸術への道』、『真の自然への道』、『真の神への道』、また『真の幸福への道』などが、すべてかつての幻影として滅び去ったこんにち、学問の職分とはいったいなにを意味するのであろうか」（邦訳、42ページ）と

問いかける時、他の学問分野と自然科学系分野、特に医学・工学・農学系のような技術系分野を区別している。それらの技術系分野は「目的」が所与のものであることを強調しているからである。

学問研究は一般に「知るに値する」という意味で重要な事柄であり、ある研究成果が重要であるかどうかは、学問上の手段によっては論証できないとする。医学の根本の前提は、生命を維持すること、苦痛をできるだけ軽減することであり、生命を維持することに意味があるかどうかについては、医学が問うことではないとヴェーバーは指摘する（邦訳、43～44ページ）。「一般に自然科学は、もし人生を技術的に支配したいと思うならばわれわれはどうすべきか、という問いにたいしてはわれわれに答えてくれる。しかし、そもそもそれが技術的に支配されるべきかどうか、またそのことをわれわれが欲するかどうか、ということ、さらにまたそうすることがなにか特別の意義をもつかどうかということ、—こうしたことについてはなんらの解決をも与えず、あるいはむしろこれを当然の前提とするのである。」（邦訳、45ページ）

この段階でヴェーバーにとって、政治の重要性が全面に出てくる。なぜなら、自然科学の目的を決定するのは、自然科学自体ではなく、社会であるからである。しかし、国家主義的政治が中心の時代のヴェーバーは教壇で政策を語ることに慎重である。学問とし

ては、「価値自由」Wertfreiheitの問題、つまり、どのような個人であっても、何らかの価値に拘束されていることを自覚する必要があると主張する。

つまり、政策的な立場を表明することは、聴衆があくまで聞く立場にある講義室、つまり、聞き手が意見を異にする場合にあっては沈黙を余儀なくされているような大学の教室においてはなされるべきではないとする。価値判断にかかわるような主張を講義で行ってはならないという。「職業としての学問」という講演にも国家主義的時代の文脈があった。

大戦後の動揺と既存の秩序に対する疑惑に満ちていた当時、この講演の聴衆である若者たちは「現実のかわりに理想を、事実のかわりに世界観を、認識のかわりに体験を、専門家のかわりに全人を。教師のかわりに指導者を」欲していたと訳者の尾高邦雄は1936年5月に書かれた訳者序文で述べている（邦訳、90ページ）。このような時代の文脈をどのように理解するか。検証すべきはこの講演の前提となるこの文脈である。

ところで尾高は、そのような時代病にかかっている青年たちに向かってヴェーバーは「日々の仕事に帰れ」と叱咤したと指摘している。「そしてこうした態度を改めて、自分の仕事に就き、そして『日々の要求』に一人間関係のうえでもまた職業のうえでも—従おう。このことは、もし各人がそれぞれの人生をあやつっているデーモン（守護神）をみいだしてそれ

に従うならば、容易にまた簡単におこなわれるのである」（邦訳、74ページ）という一節がヴェーバーの講演最後の文章である。

近代社会では、なぜ電車が動くのか、なぜ金で物が買えるのかというような一般的知識を持っていなくとも生活ができる。伝統的な社会に生きている人々は日常生活に確実に有用な知識や技術を有している。その意味で現代人は無知であるが、「欲しささえすれば、どんなことでもつねに学び知ることができるということ、したがってそこにはなにか神秘的な、予測しえない力がはたらいている道理がないということ、むしろすべての事柄は原則上予測によって意のままになるということ、—このことを知っている、あるいは信じているというのが、主知化した合理化しているということの意味なのである」（邦訳、33ページ）と指摘する。しかし、「天職」に従えと処世訓を与えるヴェーバーは目的が所与でしかない「技術」が支配している現代社会に対し何を語ることができたのであろうか。

ヴェーバーは、「主知主義的合理化の過程」、言い換えれば、「呪術に訴えて精霊を鎮めたり祈ったりする必要がなくなる」という「魔術からの解放過程」という歴史過程を西欧文明の特徴として人類の歴史的進歩の中核に据える限りにおいて、彼は、自然そのものあるいは自然と人間の関係性を「知の進歩」以外の文脈で歴史研究の対象とすることができなかったのである。（つづく）